

「体験」を重視した学習教室「花まる学習会」を設立。「小3までに育てたい算数脳」ほか、著書多数。近年、公立学校への支援にも力を入れている。

### 3 月一回の「思考力」の授業

よりよい学校づくりのための塾からの提案③

花まる学習会代表 **高濱正伸**



#### ◆塾講師が公立小で授業

二〇〇六年四月、長野県の青木村にある青木小学校で、年間を通して私のかかわりが始まった。いたくのは交通費と給食のみのボランティアで、やることは大きく分けると、①毎月一回の授業、②夏の野外での「青空授業」、③担任の先生との共同研究授業、④保護者向けの講演会、の四つであった。

当時、教育長に渡した、企画書代わりの「青木村でやりたいこと」という文書の中には、こうある。

- 一、公立学校のモデルになることを目指す。なぜなら、公立が復活しなければ、(日本に) 未来はないからである。
- (1) 塾や私立に行った子との格差が、どんどん広がる風潮に楔をぶちこむ。
- (2) 塾なしでも、塾に対抗できる公立

小・中のモデルを作る。

- (3) 百マス・音読暗唱など、すでにやっている「基礎」はその通りでよい。
- (4) 私は、前例のない「思考力指導」と「学習法指導」をやる。
- (5) 外遊びや野外体験を奨励し、空間認識力はもちろん、①バランスのとれた、②気迫と体力溢れる人を育てる。
- (6) 「日本一の塾の思考力・学習法指導」& 「真剣な野外遊びの導入」で、真に次代のモデルとなる学校を創造することに寄与する。
- (7) 今いる教師の力量で可能な部分を明らかにし、地域リソース等が必要なら部分も明らかにする。できるだけ今の陣容で、意識改革だけで改革できることがベスト。

滑稽なほど力みかえっていた自分がいる。

お前様だと笑われる文章だ。しかし、塾がかかわる当時少数の事例でも、受験指導ということはあるが、基礎学力部分での支援というのはなかったし、燃えていたことは確かだ。「思考力指導」と「学習法指導」は、公教育での、手付かずの興味深いフィールドだとも思っていた。

#### ◆考えることが好きな子に

私は、総合の時間を使って、「思考力」の授業を始めた。毎月一回、一限から六限まで、各学年二クラスの生徒を一クラスに集めて、全学年を順番に教えた。

すぐに信濃毎日新聞に囲み記事が載った。「こうした傾向が行き過ぎてしまうと、公教育の力を低下させかねない」という教育評論家の声とともに。

毛穴という毛穴から情熱というエネルギーが噴出している小岩井教育長と、誠意あ

# 親の本音の拾い方 — 担任への不満

ふれる征矢野校長のまごころを感じたから引き受けたけれど、甘くないぞと直感した。実際お二人は、私には言わなかったが、あちこちで厳しい言葉を言われたりもしたのではないかと推測している。

きつといい気持ちで迎えられる先生の方が少ないであろうし、多忙な先生方の負担に新しい業務を増やすことのない形で、始めようと考えた。

目標の第一は「考えることが大好きな子を作る」ということにおいた。

#### ◆「遊びと勉強は地続き」

計算を教え、応用として文章題を解かせて、テストもする、という学校指導の流れの中で、文章題なんて面倒くさい、ちっとも面白くないと思ってしまう小学生が、どのくらい多いことであろうか。

本来、考えることは、生きる上での醍醐味の一つである。それを体得した人は、ちゃんと考えないと生きていく気がしなくすなるものである。「考えることを大好きな子に」と言葉で言うのは簡単だが、どう指導すべきだろうか。

遊びと生活の経験量の中に、その第一ステップがあることには、誰も反論はなかる

う。さて指導はというと、まるで遊びのように入らせることが大事だと確信している。まるで遊びのように、しかし考え抜くことを必要とするボードゲームやパズルに熱中させることは、効果がある。

自分自身の経験として、数学ないしは勉強することを大好きに育った青年たちをインタビューした結果として、また、二〇年以上におよび塾講師として生徒の成長を見守った経験として、そこには自信がある。神奈川県某塾でのひたすらパズルを解かせる指導が、一世を風靡したこともある。

筋道立てて考え抜かなければ、また少しでも論理的に適当な決めつけや手抜きをすれば、とたんに負けてしまう。だからやる気に満ち満ちた心で、ウンウンと一点の論理的破綻もなく考え抜こうと努める。このことが、少なくとも脳の「集中力」をつかさどる部分を鍛えるのであろう。

前回紹介したアルゴクラブは、まさにその視点で授業設計がなされている。私は、それをベースに、①アルゴゲームの対戦、②説明活動、③立体教具(二算数脳アイキューブ)として、のちに朝日新聞社から発売)でのゲーム、④思考力パズルなぞペー

の四つを柱においた。授業の進め方は、姿勢はよく、しかし「イエー！」と大声を出してテンポ良くという、独自の花まるメソッドであった。

#### ◆一年目のアンケート

一年がたち、二五〇名ほどの全児童と保護者にアンケートを行った。結果は、97.4パーセントの子が「授業が楽しかった」と答え、92.3パーセントの子が「授業を受けて成長したと思うところがある」と答えた。

具体的に成長したと思えたことは、「算数が好きになった」が44.2%、「算数が得意になった」が28.8%、「考えることが好きになった」が45.1%、「やる気になった」が46.8%、「パズルが好きになった」が60.9%であった。

家庭で授業の報告をする姿を通してしか知ることのできないはずの保護者の満足度も、97.1%であった。

まずは、出だしの目標は、まずまず達成し成功したと言えるであろうが、その一方で、問題作成の課題などは浸透が弱く、家庭での行動の変化としてはのぞむほどのものではなかった。これは、次の年の課題となった。